

ハープは優雅に見えるかもしれませんが

ドラマチックで力強さもある楽器なんです

Interview

ハープ奏者

吉野直子さん

国内外の一流オーケストラやアーティストと共演し、
ハーブ界の最前線を走り続けてきた吉野直子さん。
10月の公演を前にお話を伺いました。



■ ハーブを始められたきっかけは？

「母がハーピスト(吉野篤子さん)なので、生まれる前からハーブの音は聴いていたと思います。レッスンを受け始めたのは、6歳のときです。幼稚園の終わり頃、父の転勤に伴って、アメリカのロサンゼルスに引っ越しました。母はアメリカでもっとハーブの勉強を続けたい、ということで、スーザン・マクドナルド先生という、素晴らしいハーピストに師事することになったんです。母のレッスンについて行くうちに、じゃあ私も、という感じで始めました。日本でも、桐朋の子供のための音楽教室に3歳から通い、ピアノも5歳から弾いていましたが、ハーブは6歳からですね。当初は母が持っていた“アイリッシュハーブ”というペダルのない小さいハーブを使っていました」

■ 日本に戻られてからは、レッスンはどうされていたんですか？

「9歳で帰国してから、日本では先生についていないんです。家では母が毎日一緒に練習してくれていましたし、夏休みと冬休みにはそれぞれ、ロサンゼルスのマクドナルド先生のところへレッスンを集中的に行っていました。ですから母を除けばマクドナルド先生が、生涯で唯一のハーブの先生ということになります。マクドナルド先

生は、昨年80歳になられましたが、まだ現役で教えられているんですよ。今でも、ハーブの行事でお会いしたり、私がいに行ったりと、親交はずっと続いています。私にとっては、もう一人の母親みたいな存在ですね。最初から素晴らしい先生に出会えて、しかも相性がすごくよかったというのはラッキーなことでした。いくら素晴らしい先生でも、必ずしもすべての生徒とうまくいくわけではないと思いますので」

■ ロサンゼルスでは、どのような練習環境だったのでしょうか

「アメリカでは子どものときから、人前で演奏するチャンスがちょくちょくありました。ホームパーティーのような場所での演奏だったり、アメリカハーブ協会の支部コンサートでの演奏だったり、です。例えていえば、三軒茶屋の町内会コンサートみたいな感じでしょうか。子どもだから、褒めてもらおうとうれしくて。また、南カリフォルニア大学のオーケストラとコンチェルトを弾かせていただく機会などもありました。子どもの頃に、人前で弾くのは楽しいことなんだな、という体験を数多くできたことは、とてもよかったですね。そして音楽とは直接関係のないことですが、英語を自然に身につけることができたのも、よかったと思っています」

ます。幼稚園の終わりから現地の子もたちと一緒に勉強できたので、ほとんど苦労せずに英語を話せるようになりました」

アメリカでの生活を経て、帰国後、とまどわれたことなどはありませんでしたか？

「9歳で帰国したあとは、麻布にある西町インターナショナルスクールに中学の終わりまで通いました。中学の3学年を合わせても60人ほどの小さな学校でしたので、もうみんなが家族みたいでした。高校はICU高校だったのですが、インターから日本の学校

に行ったのは私だけ。最初は、自分だけ違うところに行くというのに抵抗がありましたが、でも、ICU高校は帰国生が3分の2もいる高校なので、入ってみたら、私よりもずっと海外生活が長くて、日本語がへたな人がいたり、そうかと思えば、ずっと日本で育ってきた人がいたり。さまざまな文化で育ってきた友達と出会うことができました。制服というのが初めてだったので、最初は少しとまどいましたけれど(笑)」

子どもの頃を過ごしたLAで、人前で弾く楽しさを体感

ハーブの魅力、またハーブの名曲など、これを聴くのがおすすめという音源は？

「ハーブは一般的に、ポロンポロンと優雅に響いているイメージが強いかもしれませんが、心地よさだけではなくて、すごくドラマチックだったり、力強かったりもする楽器なんです。ピアノやヴァイオリンのように、誰でも知っている曲はあまりないんですけど、モーツァルトの『フルートとハーブのための協奏曲』などは、聴いたことがある方も多いのでは、と思います。フルートとのかけあいも楽しいですし、素晴らしい曲です。

ハーブにはペダルが7本あって、ドレミファソラシの7つの音に対応しています。1本のペダルが、フラット、ナチュラル、シャープと、3つのポジションに入るようになっていて、例えばファのペダルをシャープ

に入れると、ファの弦が全てシャープになるという仕組みです。ハーブは優雅に見えますが、実は足の役割も大きい、けっこうハードな楽器なんですよ」

10月には成城ホールでのコンサートを予定されていますね

「チェリストの横坂源さんとのデュオコンサートをやらせていただきます。デュオということで、それぞれの楽器の良さが引き立つようなプログラムを組みました。中心となるシューベルトの『アルペジオーネ・ソナタ』は、チェロで演奏されることの多い名曲です。ピアノではなくハーブにもとてもよく合うと思っています。横坂さんと共演するのは初めてですが、若手の素晴らしいチェリストなので、とても楽しみにしているんです」

30周年、自主レーベルの設立、 精力的な活動へ！

今年、自主レーベルを立ち上げられたと
のことですが

「ソコの録音はしばらくしていなかったのですが、コンサート会場で、昔のCDが販売されているのを見ていると、やっぱり今の自分の演奏を聴いていただきたいという気持ちがすごくあって。最近、CDを買うよりも、インターネット経由で音楽を聴くことが多くなったり、ちょっとした技術があればCDが作れる時代でしょう。そのような中で、自分が残したいものを、良い形で聴いていただくためにどうしたらいいかと考えた結果、自分でやってしまったほうが、大変ではあるけれどじっくり作れるかしら、と。それで自主レーベルを設立しました。1枚目のCDはオリジナルもあり、編曲ものもあり、今まですごく好きで弾いてきた曲や、今、大事にしている曲を集めました。次の2枚目のレコーディングは4月に終わり、リリースは来年の初め頃の予定です。そして、リリースと同じタイミングでリサイタルも予定しています。

イスラエルのコンクール(1985年、第9



回イスラエル国際ハーブ・コンクールに参加者中最年少の17歳で優勝)のあと、本格的に演奏活動を始めてから、昨年でちょうど30年になりました。節目の時期でもありませんし、40代に入ったばかりの頃は、まだ時間はいっぱいある、とどこかで思っていたのですが、40代後半になって、そうか、今やっておかないと、という気持ちが強くなってきました。いろいろなことに興味を持って、オープンでいたい、という気持ちはいつも大切ですが、これもあれも、ではなくて、どこに自分の軸を置きたいか。それが、この年代になって、はっきりしてきました。そのあたりのバランスが、この年になって取れてきたような気がします」

profile

吉野直子さん ▶▶▶

ロンドン生まれ。第9回イスラエル国際ハーブ・コンクールで優勝。これまでにベルリン・フィル、イスラエル・フィル、フィラデルフィア管などのトップオーケストラおよび世界的指揮者と共演。最新盤は「ハーブ・リサイタル～その多彩な響きと音楽」(grazioso)とオーヴェルニュ室内管弦楽団との「ハーブ協奏曲集～アランフエス協奏曲」(Aparte)。